

フィンドレー大学への協定留学 月例報告書 (4月分)

静岡文化芸術大学 デザイン学部 デザイン学科 4年 桑原大樹

帰国まで、残り 10 日程度だ。いざ帰国が目前に迫ってみると、9ヶ月、本当にあっという間だったな、と思うこともあるが、実際はまあ、全然そんなことない。そもそも、すでに過ぎ去ったある期間に思いを巡らせたら、「あっという間だった」と感じるのなんて当たり前だと思う。大学生活を振り返ってみても 3年間あっという間だったし、浪人まで合わせて高校卒業から 4 年も経っているなんて、とても信じられたもんじゃない。細かいことまで思い出そうとしてみたら、この 9ヶ月は本当に長かった。

希望と不安に塗れて渡米した 8 月のあの日。希望の方が多かったらうか。日本での前期の授業が終わり、一息つく暇すらないまま 13 時間のフライト、しかも 2 時間の遅延。時差ボケなんてお構いなしに 1 週間みっちり詰まった完全英語のオリエンテーション、日本の何倍も美味しいハンバーガー、信じられないほど派手で楽しいウェルカムパーティ。毎日のように英語で会話し、「ああ、俺は今、ついにあの憧れのアメリカにいるんだ」と思いながら生きていた。私の友人の幅は一気に世界に広がり、英語力もみるみる伸びていった。

しかし生活に慣れてくると、やはり嫌なところが目立ってくる。食べ物にも、生活設備の不便さにも嫌気がさし、外国人とのバックグラウンドの違い、根本的な考え方の差もストレスだった。身内の不幸も、人間関係のトラブルも抱えながら生きていた。できるだけ外国人と話そう、と努めていた私には、日本人の中に心の底から悩みを相談できる人はいなかったが、それでも生活していかなければいけない、授業に出なければならぬ、留学するというのはそういうことだ、愚痴なら日本で言えばいいと、そうやって自分を押しさえ込んで毎日過ごしていた。

ある時点から、日本の友人と連絡を取ること、日本語を使って話すことに、そこまで罪悪感を覚えないようにしてみよう、と思うようになった。このままでは破綻してしまうと思ったからだ。「せっかくアメリカにいるのだから」という考えを、忘れないようにしつつも、あまり囚われすぎずに、たまには日本にいる友達と日本語でゲームをしてみたり、SNS で話してみたりしたって良い。そうやって留学を乗り切ろうと決めた。

だが、冬休みを迎えて、環境はさらに悪化した。田舎のフィンドレー市では、1ヶ月もある冬休みを楽しく過ごせるような施設はない。車があれば行けないこともないが、アメリカ人は実家へ帰ってしまうから、いない。毎日 1 人だ。-20°C の環境下で水道も凍結し、人生最悪のクリスマスを過ごした。この時点で、何年も続いていた人間関係にも変化が起きて、その後の留学生活では、そこへかなりの心労を割くことになった。

後期の授業が始まってすぐは、比較的良くなった。冬休みを機に日本人の留学生と仲良くなり、悩みを相談する相手ができたこと、特に、同じ環境下で頑張っている仲間と心を開けたことはかなり大きかったし、学業面も、先生が代わり、授業が自分のレベルに合っている

感じがした。外国人の知り合いも増え、留学生生活を充実させている感覚があった。毎日授業に出て、友達と課題をやり、ダラダラとお喋りをし、夜になったら帰って寝た。特別目新しいことはしなかったので留学報告書のトピックには困ったが、英語の伸びも感じていたし、生活そのものに特に不満はなかった。

しかし、日本への帰国が近づくにつれて、「帰りたい」という気持ちがどんどん強くなっていった。先述した人間関係にもついに終止符が打たれ、毎日毎日、落ち込んでいた。早く友達に会いたい。話を聞いてほしい。おにぎりを食べて、味噌汁を飲んで、湯船に浸かった後はぐっすり寝て、朝になったら、風が気持ちいい浜松を自転車で勢いよく駆け抜けるんだ。新しく1年生を迎えて活気にあふれた文芸大は本当に魅力的で、帰るのが楽しみで楽しみで仕方なかった。

留学を振り返ってみると、本当に不満ばかりタラタラと、情けないことだ。せつかく高いお金を払ってアメリカまで勉強に来ているのに、帰りたい帰りたいと、よくもまあ毎日言っていたと思う。

ただ最近では、そんな自分を振り返って、これはもしかしたら思い込もうとしているだけなのかもしれないが、「俺、実は楽しんでたんじゃないか？」と思うことがある。

春を迎え、暖かい風が吹くようになった。植物の匂いがする。人々が半袖で出歩くようになり、日も長くなってきた。見覚えのある光景だ。中学生の時、「もしかしたら行くのかなあ」なんて思っていた、留学生活。それがついに始まった時のことを、思い出していた。希望に溢れていた。毎日が新鮮だった。楽しかった。

世界中から集まった人々と友人になり、車に乗せてもらってスポーツを見に行き、日本とは全然違う祭りに行き、各国の料理をいただき、日本の料理を振る舞い、ジェットコースターしかない遊園地に、トウモロコシ畑を丸ごと使ったお化け屋敷、日本とは格の違うディズニーランド、ハロウィンになれば全ての家の前にめっちゃめっちゃデカイカボチャが並び、キリスト教徒の言うクリスマスは破格で、タイムズスクエアのニューイヤーカウントダウンは渋谷のスクランブル交差点なんて比較にならなくて、冬は考えられないほど寒くて、ニューヨークは恐ろしいほどに世界の中心で、危険で、面白く、新鮮で、憧れの具現化だった。ほとんどの人の立ち居振る舞いは我々日本人の常識からかけ離れていて、それに憤慨もしたし、笑ったし、そしてそれは興味深かったし、もっと知りたいと思えるものだった。

留学生活が辛いなんて、当たり前だ。食べ物の違いも考え方の違いも、日本にいるときに考えつく「差」なんてのは当然の如く凌駕している。生まれ育った環境と全く違う世界で、毎日ちゃんと生きていかななくてはならない。そして、そんな生活の中でも、特別に酷い何かが起こらないとは限らないのだ。家族や友人の身に、何か酷いことが起こるかもしれない。そうなったとしても、簡単には会いに行けない。自分の身だって、全然安全じゃない。

しかしこうした「留学」という環境を、私は生き抜いた。英語力は格段に上昇した。もち

ろん完璧には程遠いが、今後の英語学習の確固たる土台になった。辛さに目を向けすぎていたとは思いうし、全てが終わろうとしている今だからこそ思えることなの言うまでもないが、耐え難い異国生活の中で、私は確かに成長し、楽しんでいたのだ…かもしれない。

もっと楽しさに目を向ければ良かったと思う。振り返ってみれば楽しんでいただけに、辛いことばかり考えて、報告書がそんな話ばかりだったことも後悔している。とはいえ、やはり留学生活が辛いのは当たり前で、その中でも楽しんでいた記憶はちゃんと残っていて、その事実を見誤ることなく正しく認識できていて、そして実際に英語が扱えるようになったのだから、これはもう、本当に、何事にも変えられない財産だ。留学にきて良かった。二度と来たくはないけど。そう、美化しすぎないことも大切である。

いよいよ帰国だ。送り出してくれた家族、応援してくれた友人、まだ見ぬポケモン——。

帰ったら、それはそれで大変だと思う。遅れて参加する授業に追いつかなくてはならないし、バイトも始めなくてはいけないし、調子に乗って企画した主催イベントが4つも溜まっているし、インターンだって行かなくてはならない。でも、きっと大丈夫。俺たちの戦いは、これからだ!!

ご愛読ありがとうございました。
桑原先生の次回作にご期待ください。



アメリカで一番美味しかったハンバーガー



訓練中のセラピードッグ (子犬)